

中津市

みや の しも おか やま
宮ノ下遺跡・岡山遺跡

一般国道 212 号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

中津市
宮ノ下遺跡・岡山遺跡

一般国道 212 号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

2022

大分県立埋蔵文化財センター

2022

大分県立埋蔵文化財センター

宮ノ下遺跡・岡山遺跡

一般国道 212 号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

2022

大分県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した一般国道 212 号三光本耶馬溪道路の建設工事に伴う宮ノ下遺跡・岡山遺跡の発掘調査報告書です。

宮ノ下遺跡の調査では、包含層中より主に縄文時代後期から弥生時代早期にかけての土器・石器などの遺物が多く出土し、周辺に遺構が展開する可能性が高いことがわかりました。

岡山遺跡の調査では、岩壁面に彫り込んだ 6 基の窟とみられる遺構を検出しました。中心の窟とそこに安置されていた石造仏は、これまで地域の人たちにより祀られてきたものですが、これらの製作年代が中世にまで遡る可能性があることがわかりました。

今回の調査結果が地域の歴史を解明する資料となるとともに、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに報告書の刊行にあたり、多大なご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月 31 日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 松 本 昌 浩

例 言

- 1 本書は国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所から依頼を受けて実施した一般国道212号三光本耶馬溪道路建設工事に伴う発掘調査の調査報告書である。
- 2 本書は、令和元年度に実施した宮ノ下遺跡、令和2年度に実施した岡山遺跡の調査成果を収載している。
- 3 宮ノ下遺跡の発掘調査実施にあたり、発掘作業及び記録作成・現場管理等を支援業務として株式会社島田組大分営業所に委託した。岡山遺跡の表土除去・安全対策業務は株式会社平成建設、基準点設置・レーザー測量業務は株式会社アオイ、遺構掘削・空中写真撮影業務は梅林建設株式会社、調査員詰所等借上業務はウメサン株式会社に委託した。
- 4 出土遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレース・写真撮影等については、株式会社九州文化財総合研究所（令和2年度・令和3年度）に委託した。
- 5 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 6 本書で使用する測量座標値は世界測地系で、方位は座標真北である。
- 7 本書の図版作成・レイアウトについては東晃平・植田紘正・服部真和が、本書の執筆については第4章第2節「窟の加工痕について」を植田が、それ以外を服部が行った。岡山遺跡の調査所見については佐藤信からご教示を得た。

目 次

第1章 調査の経緯	1	第4章 岡山遺跡発掘調査の成果	15
第1節 調査の経過	1	第1節 調査の概要	15
第2節 発掘調査の経過	1	第2節 遺構と遺物	15
第3節 整理作業・報告書作成の経過	2		
第4節 調査組織の構成	2	第5章 総括	23
		第1節 宮ノ下遺跡	23
第2章 遺跡の位置と環境	3	第2節 岡山遺跡	23
第1節 地理的環境	3		
第2節 歴史的環境	3	写真図版 宮ノ下遺跡	25
		写真図版 岡山遺跡	27
第3章 宮ノ下遺跡発掘調査の成果	5		
第1節 調査の概要	5		
第2節 遺構と遺物	5		

第1章 調査の経緯

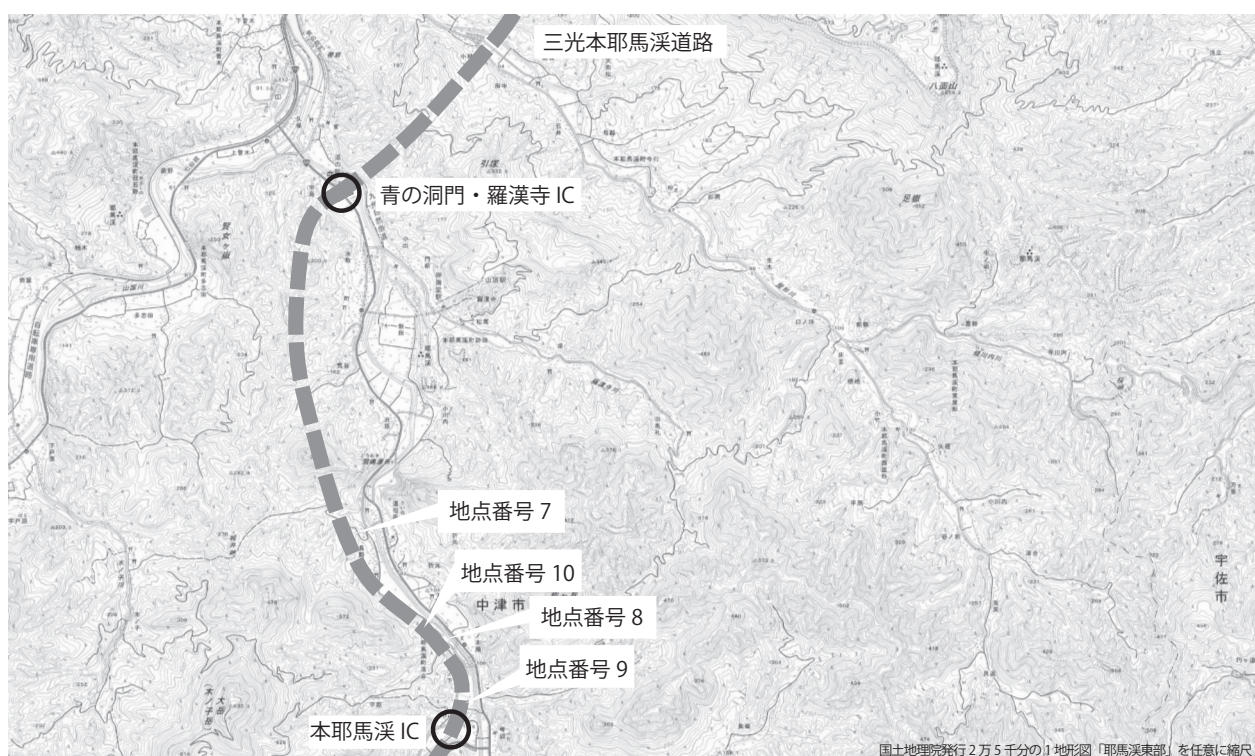
第1節 調査の経過

国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所では、中津・日田を結ぶ災害に強いネットワークの構築と地域経済の活性化、物流の効率化や広域観光の振興を目的として、一般国道212号三光本耶馬溪道路建設工事を実施している。宮ノ下遺跡（地点番号9）・岡山遺跡（地点番号10）の位置する事業対象地（第1図）は、試掘調査および現地踏査により遺跡の所在することが判明したため、周知遺跡の登録、用地買収等が終了した場所から発掘調査（本調査）を実施することとなった。なお、地点番号7・8については試掘調査の結果、遺構・遺物の出土は確認できなかった。

第2節 発掘調査の経過

地点番号9は、平成31年4月16・17日の2日間に試掘調査を実施した。結果、一部の地点から縄文晩期の土器・石器が出土し、周辺に遺跡が存在する可能性が高いと判断されたため、宮ノ下遺跡として新規登録を行い、令和2年2月4日～3月9日に、遺物が出土した地点の本調査を実施した。調査面積は637㎡で、調査区を区域1・区域2に分け、折り返して調査を行った。包含層からは縄文後期・晩期～弥生時代早期の土器・石器が多く出土したものの、明確な遺構は確認できなかったが、周囲に遺構が展開する可能性がある知見を得ることができた。

一方、地点番号10には窟が存在し、その内部には石造物（地藏菩薩坐像）が周辺地域の人により祀られていたことから、地点番号10については当初から発掘調査（本調査）を実施する方針で協議を行っていた。令和元年度に窟の周辺まで踏査を行い、複数の窟が点在することが確認できたため、窟が分布する範囲を岡山遺跡として新規登録を行った。用地買収や樹木伐採など条件整備を経て、令和2年10月29日～11月12日に本調査を実施した。調査面積は170㎡で、合計6基の窟を確認するとともに、窟に安置されていた石造物についても調査を行った。



第1図 三光本耶馬溪道路図

第3節 整理作業・報告書作成の経過

整理作業はそれぞれの発掘調査の翌年度、すなわち令和2年度に宮ノ下遺跡の整理作業、令和3年度に岡山遺跡の整理作業を行った。報告書は令和3年度に宮ノ下遺跡・岡山遺跡を合わせて刊行した。

第4節 調査組織の構成

宮ノ下遺跡・岡山遺跡の発掘調査および整理作業・報告書作成に係る調査組織は、下記のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

令和元年度 宮ノ下遺跡発掘調査

調査責任者 江田 豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）

吉田 寛（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長） 4月25日まで

後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長） 4月26日から

調査担当 綿貫俊一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課課長補佐）

服部真和（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主任）

令和2年度 岡山遺跡発掘調査・宮ノ下遺跡整理作業

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課兼調査第一課長）

松本康弘（大分県立埋蔵文化財センター企画普及課長）

調査担当 佐藤 信（大分県立埋蔵文化財センター企画普及課主事） 発掘調査

後藤一重（大分県立埋蔵文化財センター企画普及課嘱託） 発掘調査

服部真和（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主査） 整理作業

綿貫俊一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課嘱託） 整理作業

令和3年度 岡山遺跡整理作業・報告書作成

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

吉田 寛（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長）

調査担当 植田紘正（大分県立埋蔵文化財センター調査第一課主事） 報告書

服部真和（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主査） 報告書

小堀嵩史（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主事） 整理作業

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

宮ノ下遺跡・岡山遺跡は、大分県中津市本耶馬溪町に所在する。一級河川の山国川は福岡県と大分県の県境付近を北流して周防灘へと注ぎ、下流域に広大な沖積平野を形成する。本耶馬溪町のある中流域では山塊が川に迫り、流域の溪谷は耶馬溪と呼ばれ青の洞門・競秀峰などの景勝地が有名である。山国川やその支流河川である屋形川・跡田川などは山間部を縫うように流れ、流域の河川沿いには浸食によって形成された狭い平野が続いている。遺跡は主にこうした流域の周辺部で確認されている。

第2節 歴史的環境

中津市本耶馬溪町において発掘調査事例は決して多いとはいえないが、調査で明らかとなった成果を概観していく。

旧石器時代の遺跡はこれまでのところ調査されていないが、近接する中津市三光の渋見池遺跡ではナイフ形石器や有茎尖頭器が採集されている。縄文時代の遺跡は山国川やその支流に形成された平野部で点在して確認できる。粉洞穴は、屋形川の浸食により形成された開口部 11m・奥行き 9m 規模の洞穴である。ここからは縄文時代早期・前期・後期の遺物とともに、各時期の埋葬人骨が層をなして確認されている。その数は 66 体にもおよび、縄文時代の埋葬法を知るうえで重要な遺跡である。粉洞穴と同じ屋形川流域に位置する下屋形遺跡では、遺構は確認されていないが早期の押型文・晩期の刻目突帯文土器が出土している。山国川流域の河岸段丘上に位置する多志田遺跡では包含層から後期西和田式・晩期の刻目突帯文土器とともに扁平打製石斧などが、上曾木遺跡では後期鐘崎式・西平式・晩期の遺物が出土している。本耶馬溪町に隣接する耶馬溪町では、山国川流域に位置する森遺跡と城井遺跡で磨製石斧が採集されている。跡田川下流部に位置する古戸遺跡では後期・晩期を主体とする竪穴建物や土坑・埋甕の遺構とともに土器・石器・土偶・緑色クロム白雲母製と考えられる玉などが出土している。跡田川の源流である西谷川と東谷川の合流点に位置する古庄屋遺跡では中世の遺構に混在して早期の押型文・平椀式、晩期の浅鉢などが出土している。

弥生時代の遺跡は、古戸遺跡で刻目突帯文土器と板付式壺を組み合わせた小児棺をはじめ、中期後半・後期終末段階の竪穴建物・土坑などが確認されている。また稲作の伝播を考える上で重要となる前期の三角形を呈する石包丁や、中期の銅鏃も 1 点ながら出土している。下屋形遺跡では中期と考えられる円形の竪穴建物や、後期後半から終末段階の竪穴建物・円形周溝遺構・小児甕棺などが確認されている。

古墳時代の遺跡は、下屋形遺跡で集落を画する布留式段階の溝をはじめ、後期の竪穴建物が確認されている。この下屋形遺跡の集落は、山国川や屋形川を介した人や物資移動の交通ルート上に位置するという地理的重要性も指摘されている。一方、墳墓については、冠石野に鬼塚・メン塚が存在し、石棺の出土が伝わるが詳細は不明である。また耶馬溪町には円墳と推測されるホキノ上古墳・城井若宮古墳などがあるが、詳細な調査は行われていない。

古代の遺跡は、わずかに古戸遺跡で 12 世紀代の土坑と遺物が確認されている程度である。

中世の遺跡は、下屋形遺跡で掘立柱建物・土壇墓・井戸などが検出されており、屋形川流域の支配者に関する居館と推測される。古庄屋遺跡では 13～14 世紀の居館跡が検出されている。溝と柵列で囲まれた 1 町四方の区画内から掘立柱建物や土坑・土壇墓が確認され、宇佐郡や玖珠郡へとつながる交通の要所でもあることから、東国御家人宇都宮氏一族に関連する居館と考えられている。中津を代表する景勝地の一つ羅漢寺は曹洞宗の古刹である。開山は暦応元（1338）年に円龜昭覚によるとされ、五百羅漢については円龜昭覚と逆流建順により製作されたと伝わる。近年の石造物調査により古羅漢や羅漢寺参道、無漏窟の五百羅漢などの石造物が 14 世紀後

半に製作されたことが明らかとなっている。大分県下全域で行われた中世城館調査では、古庄屋遺跡の背後に位置するジョウヤ城や、御祖神社背後の高橋家居城と伝承される落合城があげられているが、詳細は不明である。また中世石造物調査において、宮ノ下遺跡・岡山遺跡の周辺では浄照寺板碑・層塔や高橋家墓地内の五輪塔・角柱塔婆があげられている。この他にも本耶馬溪町内では今行宝塔・杣宝塔・屋成家墓地宝塔・屋成家墓地石塔群・雲谷寺宝篋印塔などの中世石造物が点在している。

近世の本耶馬溪町は黒田氏・細川氏・小笠原氏と領主がかわり、続く奥平氏になると中津藩領と幕府領（天領）に二分され、宮ノ下遺跡・岡山遺跡の位置する落合は幕府領となる。幕末期には討幕運動の中心人物でもあった高橋清臣の山荘を幕府側が襲撃する木ノ子岳事件が起こるなど、動乱の舞台となった。



(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「耶馬溪東部」を4万分の1に縮小・加筆)

1. 宮ノ下遺跡
2. 岡山遺跡
3. 杣洞穴
4. 下屋形遺跡
5. 上曾木遺跡
6. 中ノ島遺跡
7. 古戸遺跡
8. 跡田遺跡
9. 古庄屋遺跡
10. ジョウヤ城跡
11. 多志田遺跡
12. 天神前遺跡
13. 中村遺跡
14. 平田城跡
15. 森遺跡
16. ホキノ上古墳
17. 城井若宮古墳
18. 下戸原遺跡
19. 向戸原遺跡
20. 高城跡

第2図 宮ノ下遺跡・岡山遺跡と周辺の遺跡 (1/40,000)

第3章 宮ノ下遺跡発掘調査の成果

第1節 調査の概要

宮ノ下遺跡は中津市本耶馬溪町落合に位置する。跡田川の源流である西谷川と東谷川の合流地点にあり、流域の周辺には狭く細い平野が形成され、現在では水田が広がる。調査地点の字名は「三反通」で、周辺には前田・六反通・神田・石原田などの田に関する字名が多く見られる。具体的な水田開発の時期を示す史料はないが、江戸初期（元和年間）の『小倉藩人畜改帳』によれば、落合村は周辺地と比べ戸数・人数が多く、古庄屋遺跡や中世石造物・寺院関連の字名が点在するなど中世的景観を残す場所であることから、中世段階から開発が本格的にすすめられてきたと考えられる。

調査面積は637㎡で、調査区を区域1・区域2に分けて調査を行った（第3図）。調査区内の基本層序は、大きく現在の水田層と包含層からなる。水田層から出土した遺物は掲載していないが、中世段階の土師質鍋や東播系鉢などの小片がわずかに出土しており、宮ノ下遺跡から南方向約250mの距離にある古庄屋遺跡との関連が考えられる。包含層は黒褐色土ないしは暗褐色土で、主に区域1に残存しており、厚さは5～15cm程度である。包含層の厚さがあまりないため、包含層出土遺物の出土地点・レベルはおさえず、グリッド単位で取り上げを行った。グリッドは基本10×10mを4等分し、方位をグリッド名に付した（第3図参照）。ただし台石などの主要遺物については出土地点とレベルをおさえている。

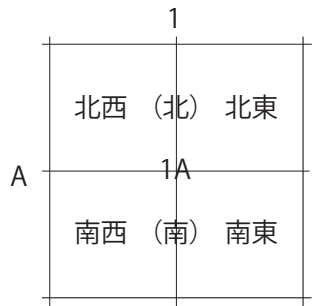
第2節 遺構と遺物

区域1（第4図・第6図～第11図）

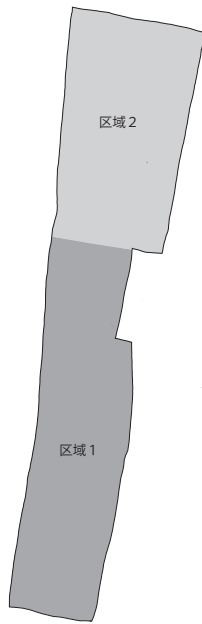
区域1は調査区の南側部分にあたる。水田の段落ちや近現代の土坑・電柱などの攪乱以外、主要な遺構は確認できなかった。平面図に図化している遺構にみえるものの多くは凹みに包含層土が堆積したものとみられる。包含層は西から東へ、南から北方向へ緩やかに傾斜しており、旧地形を反映した堆積であるため、西壁土層（第4図）では包含層が一部しかおさえられていない。包含層は部分的に削平されているものの、2Bグリッドから2Dグリッドの範囲に残っており、なかでも2C・2Dグリッドを中心として、縄文後期・晩期～弥生早期にかけての遺物が多く出土した。包含層掘削後、特に遺物の出土が多かった部分にトレンチを入れて下位の状況確認を行ったが、遺物や遺構は確認できなかった。

区域1・2の包含層出土遺物は、実測図中に出土グリッド名・石材名（姫：姫島産黒曜石、姫安：姫島産ガラス質安山岩、安：安山岩、角安：角閃石安山岩、黒：腰岳産黒曜石、サ：サヌカイト、金山サヌカイトなど）・重量を記している。土器胎土は角閃石・長石以外が混入する特徴的なものがないため記述を省略する。

1～10は縄文後期の土器である。1は波状口縁で、頂部は凹ませ、屈曲部から口唇部にかけて沈線を施す。鐘崎式段階。2・4は口縁部で、巻貝による擬似縄文とやや細い直線の沈線文を施す。2は直線的、4は内湾する。3は波状口縁。5は口縁もしくは脚部か。内面に沈線を施す。6は磨消縄文。把手が剥落している。7は胴部片で、外面は巻貝による擬似縄文が施される。8は深鉢の屈曲部。9・10は浅鉢の外反口縁。11は後・晩期の浅鉢の口縁部か。12は晩期精製浅鉢の底部。13～15は晩期の深鉢胴部。条痕調整で、別個体とみられる。16～20は精製浅鉢である。16・17は頸部が短い。18は胴部が屈曲し稜をもつ。黒川式古段階。19は口縁部に突起が付き、わずかに赤色顔料が付着する。20は胴部の屈曲部。21～27は弥生早期に位置づけられる土器である。21は端部に刻目をいれる浅鉢の口縁部か。22～27は刻目突帯文甕で、下黒野段階に位置づけられる。22～24は口縁部の立ち上がりが外反、26はやや丸みをもち、27は直線的である。25は胴部の屈曲部に刻目突帯が付く。28～35は縄文後・晩期から弥生早期にかけての底部である。28・29・31～35は平底で、端部が外に張り出すもの・やや上げ底の底部がある。30は丸底ぎみの底部に低い高台状の脚部が付く。

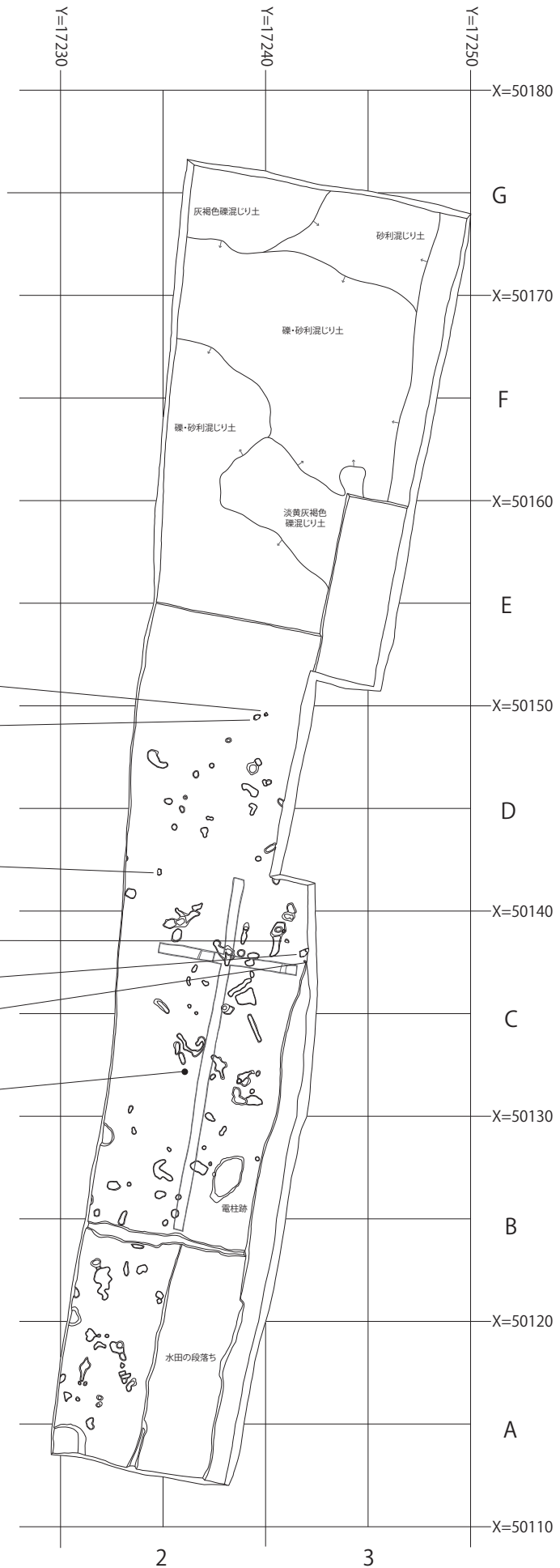


グリット遺物取上げ表記例



区域図

- 第10図68
- 第10図67
- 第10図66
- 第11図70
- 第10図65
- 第9図56
- 第10図61

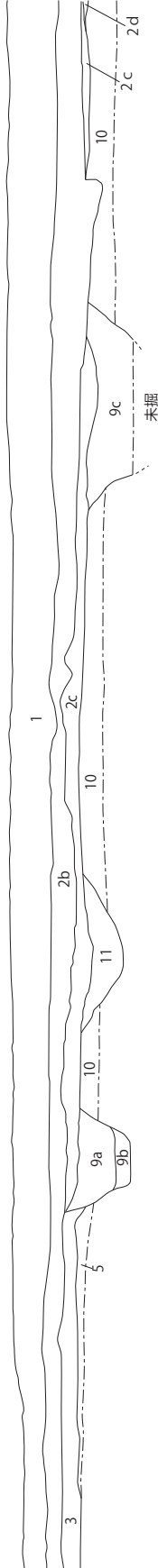


第3図 宮ノ下遺跡 平面図 (1/300)

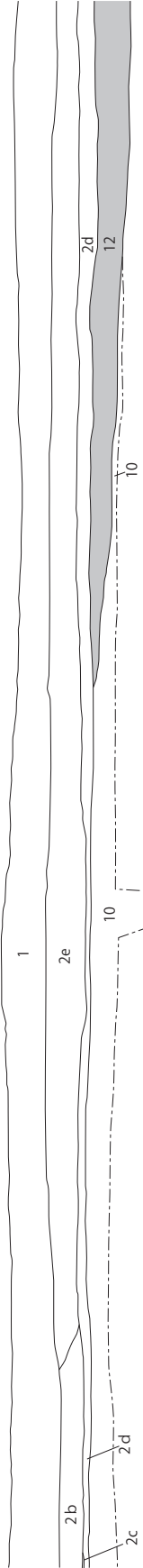
110.0m



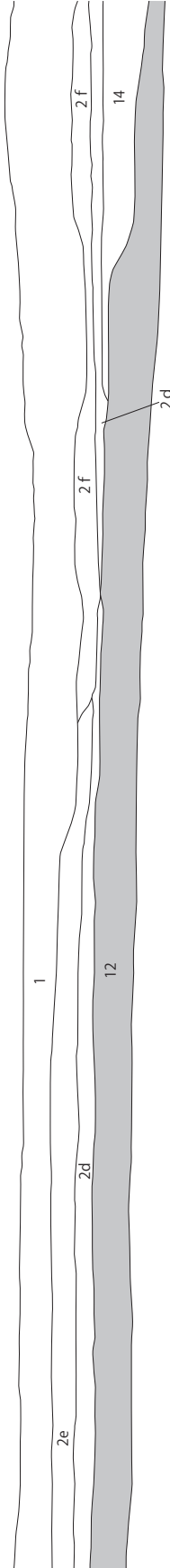
110.0m



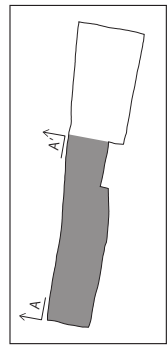
110.0m



110.0m

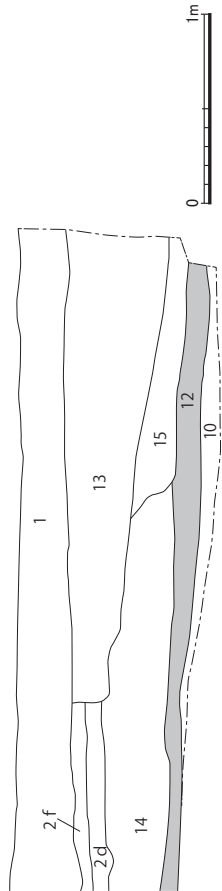


- 9b. 淡灰色粘砂土
- 9c. 灰褐色土 水田土 軟分選じり
- 10. 暗褐色粘質土 シルト質
- 11. 暗褐色粘質土 掘り込み埋土か
- 12. 黒褐色土 遺物を多く含む 小礫選じり 上部は軟分選じり
- 13. 暗灰色粘質土 カクラン土 小礫選じり 粘性強くしまっている
- 14. 灰褐色粘質土 現代のカクラン土 小礫選じり 粘性あり
- 15. 灰色粘質土 現代のカクラン土 粘性あり



- 1. 灰色粘質土 現在の水田土 砂選じり
- 2a. 黄褐色マンガン層 下部に軟分選着し、硬化
- 2b. 灰黄褐色粘質土 團扇形成時の埋土 軟分選じり
- 2c. 灰色粘質土 水田層 砂選じり
- 2d. 褐色マンガン層 軟分選着
- 2e. 灰色粘質土 軟分・砂選じり
- 2f. 暗灰色粘質土 小礫選じり 水田土のブロック選じり 粘性あり
- 3. 暗灰色粘質土 5mm ~ 1cm 寸の小礫選じり
- 4. 暗灰色粘質土 5mm 寸の小礫選じり
- 5. 灰黄色粘砂土 小礫選じり 水田土の選じり
- 6. 暗灰色粘質土 水田土の選じり
- 7a. 灰褐色土 水田土 軟分選じり
- 7b. 暗灰色粘質土 7aより色調が暗い
- 7c. 灰黄色粘砂土のまとまり
- 7d. 暗褐色土 粘性あり
- 8. 暗褐色土 粘性あり 掘り込みか凹みの埋土
- 9a. 灰色粘質土 水田土に近い埋土 褐色土と灰色土の選じり

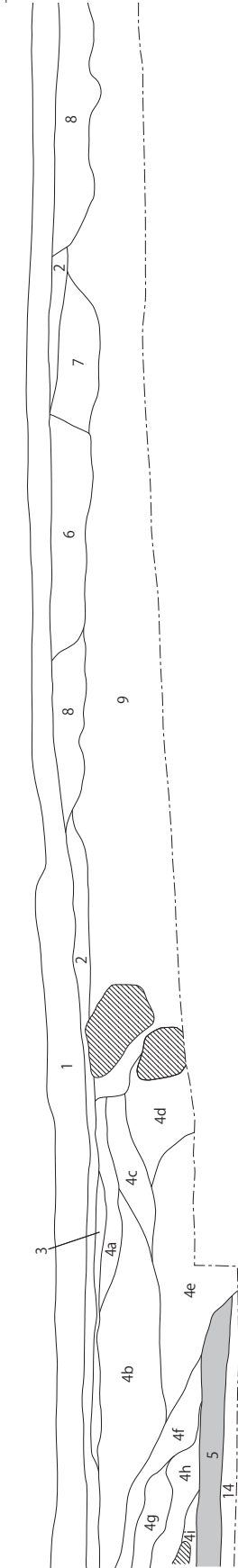
110.0m
A-A'



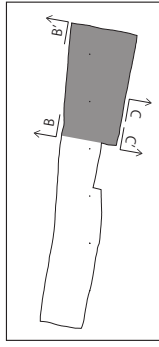
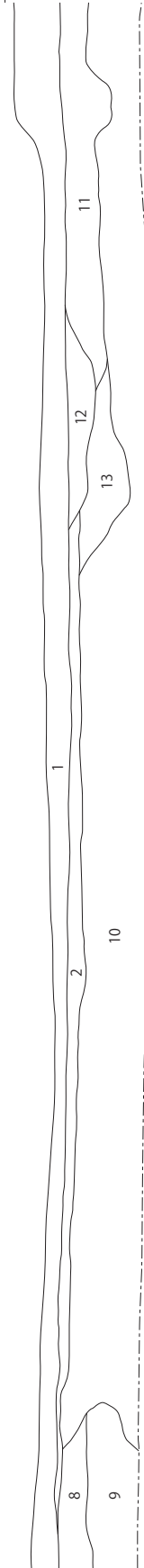
0 1m

第4図 宮ノ下遺跡 区域1西壁土層断面図(1/40)

110.0m



110.0m



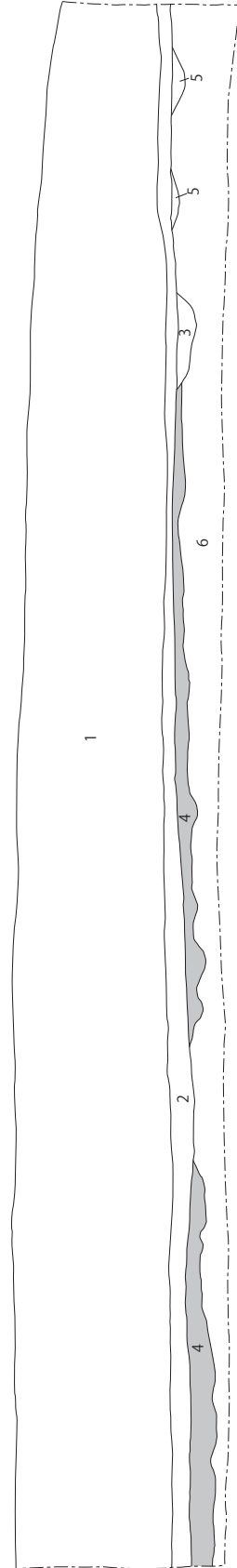
- 5. 黒褐色粘質土 小礫混じり 粘性が強くしまりあり
- 6. 暗黄褐色粘質土 ブロック混じり 粘性・しまりあり
- 7. 暗灰褐色粘質土 ブロック混じり 粘性・しまりあり
- 8. 暗黄褐色粘質土 粘性・しまりあり
- 9. 暗灰褐色粘質土 多量の砂混じり
- 10. 暗灰褐色粘質土 9層よりグライ化した粘質土が多く混じる
- 11. 暗茶褐色粘質土 小礫混じり
- 12. 暗灰褐色粘質土 暗褐色土ブロック混じり 小礫混じり しまりなし
- 13. 暗灰褐色粘質土 粘性が強くしまりあり
- 14. 暗褐色粘質土 シルト質土

- 4f. 淡黄褐色土 粒子が細かい、混じりなし
- 4g. 暗黄褐色土 粒子が細かい、混じりはない
- 4h. 暗黄褐色土 暗茶褐色土ブロック混じり 粘性あり
- 4i. 灰黄色粘砂土 砂質・グライ化のため変色が

- 4b. 暗黄褐色土 暗褐色土ブロック混じり しまりあり
- 4c. 暗黄褐色土 小礫混じり しまりあり
- 4d. 黄褐色土 粘質土・砂混じり しまりあり
- 4e. 灰褐色粘質土 粘質土ブロック・砂混じり しまりあり

- 1. 灰色土 現代の耕作土
- 2. 暗茶褐色土 フォンク土 鉄分沈着のため硬質
- 3. 暗黄褐色土 水田土 鉄分沈着
- 4a. 暗黄褐色土 暗褐色土ブロック混じり 人為的埋土 しまりあり

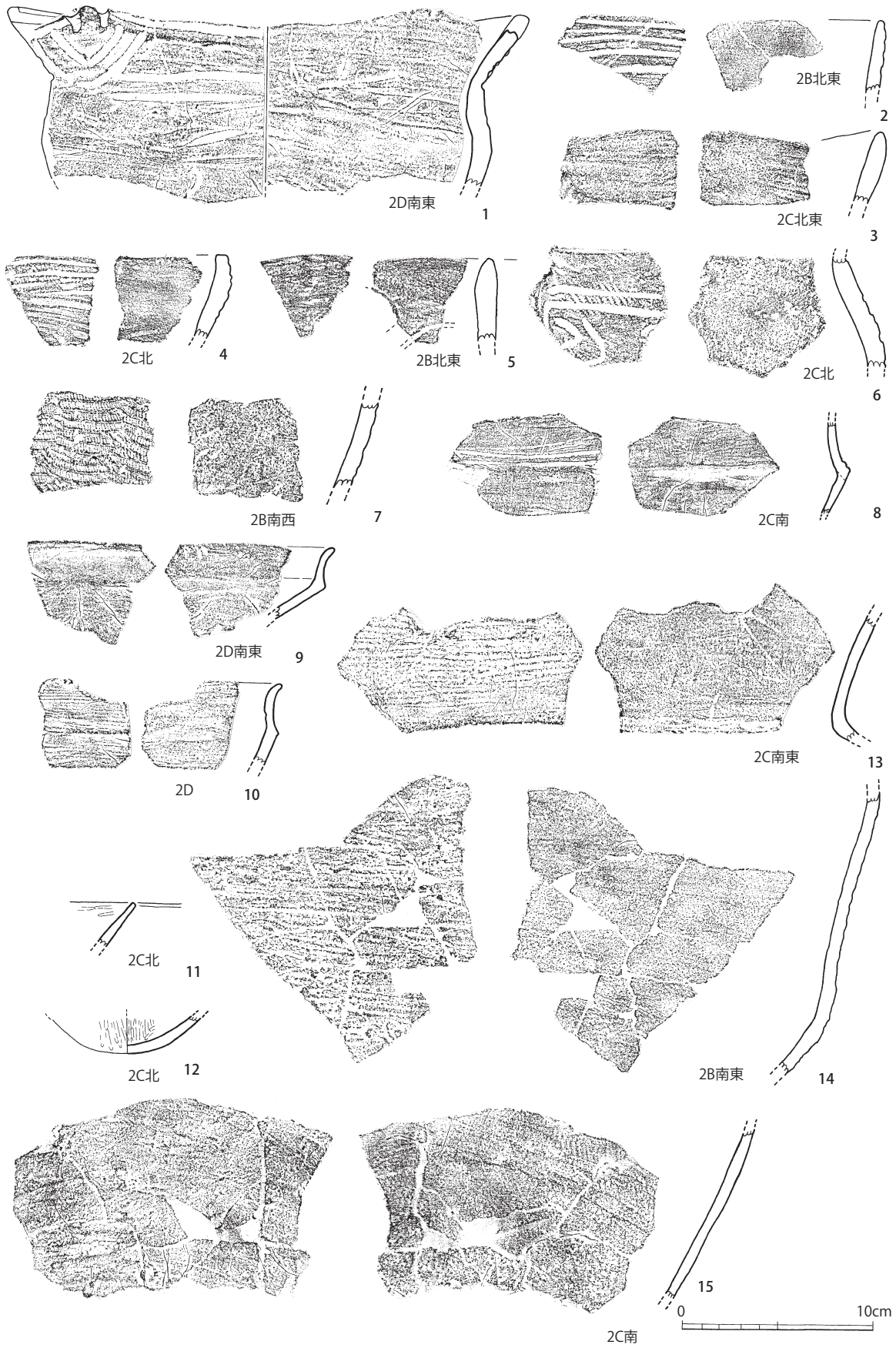
110.0m
C



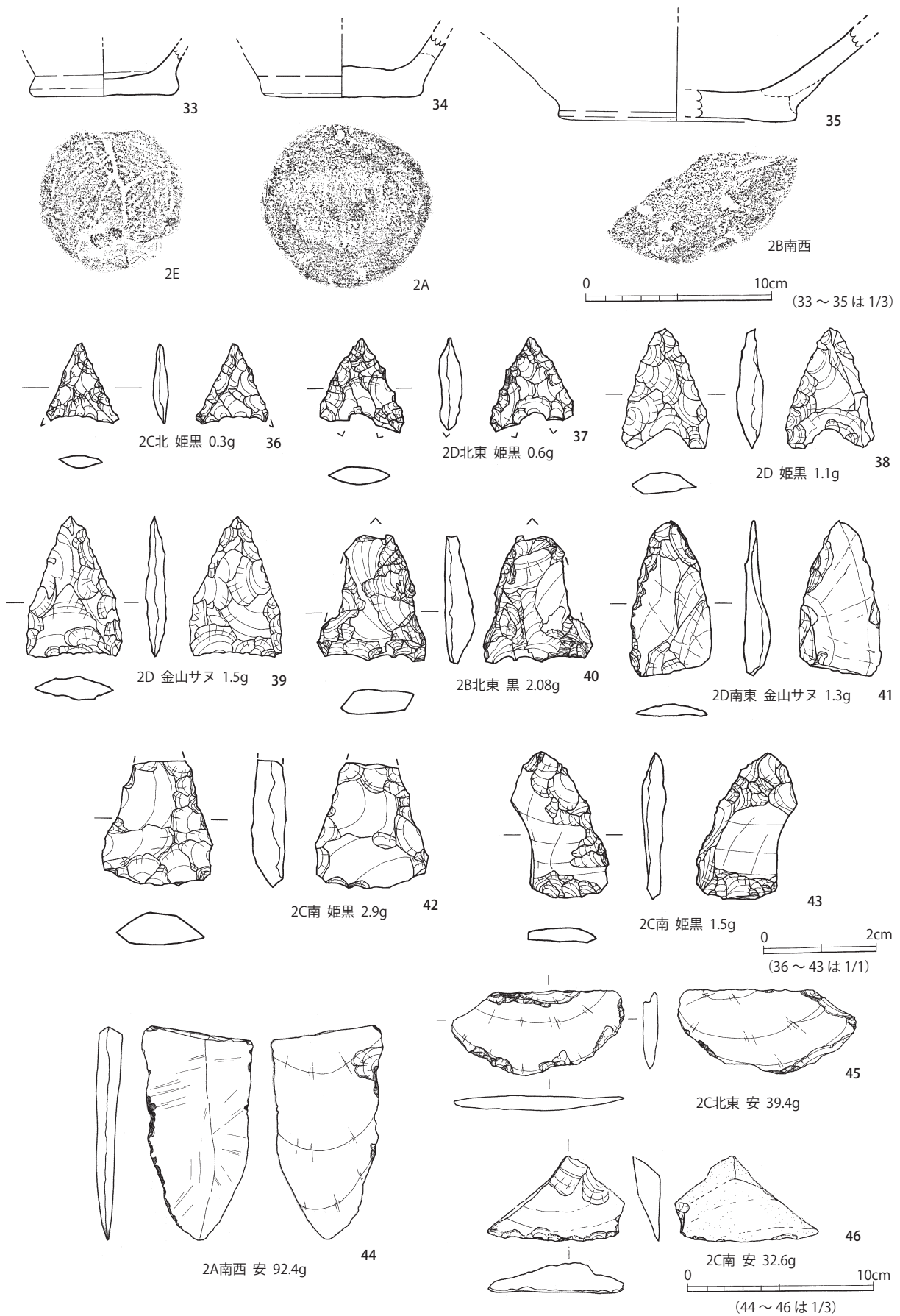
1m
0

- 1. 暗黄褐色土 ブロック混じり土
- 2. 灰褐色粘質土 水田土 鉄分沈着
- 3. 暗黄褐色土 白色粒・砂混じり 粘性ややあり
- 4. 暗黄褐色土 砂混じり
- 5. 暗黄褐色土 4層と比べ粘性あり
- 6. 暗黄褐色土 3cm大の小礫混じり 粘性あり

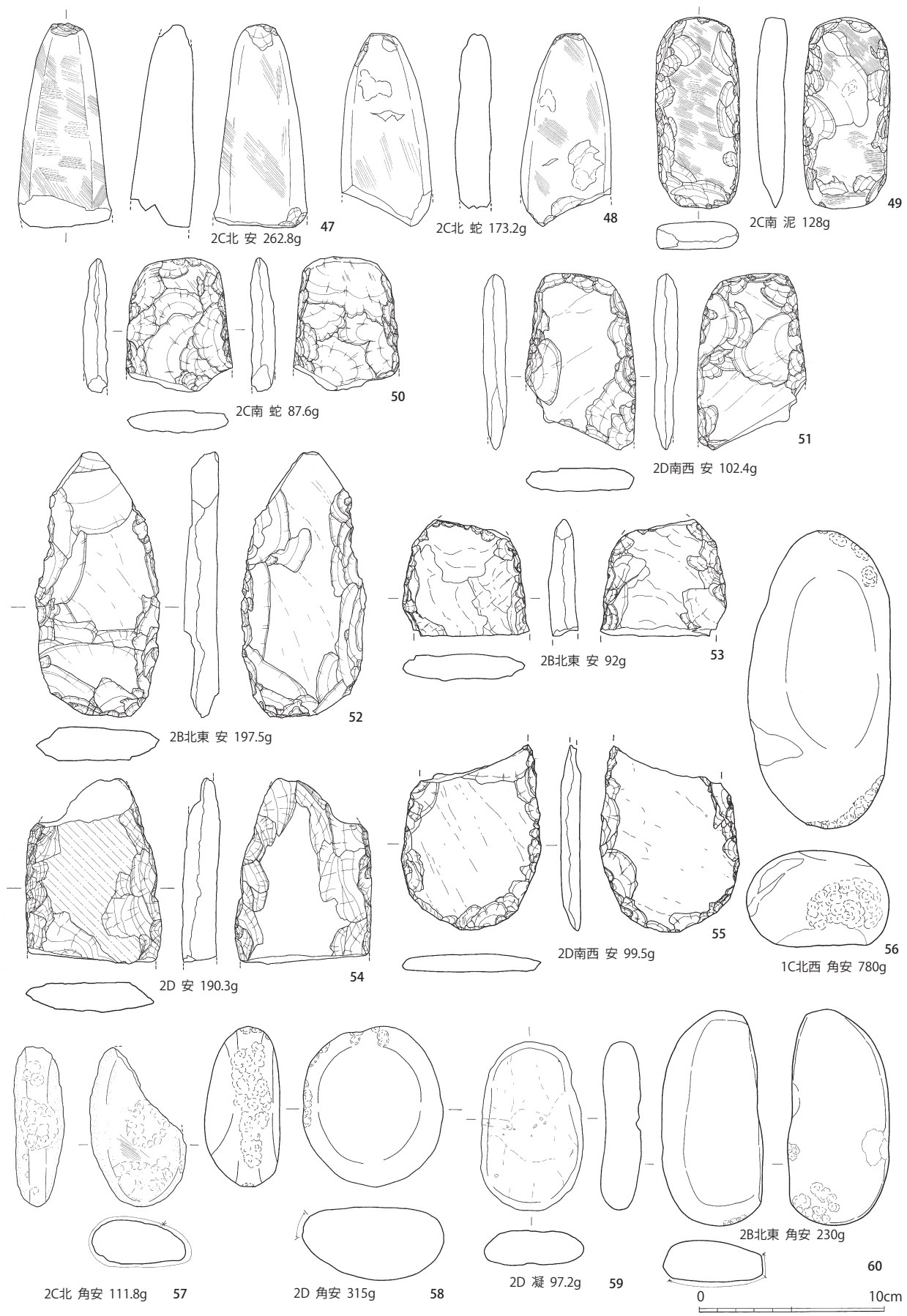
第5図 宮ノ下遺跡 区域2西壁・トレンチ土層断面図 (1/40)



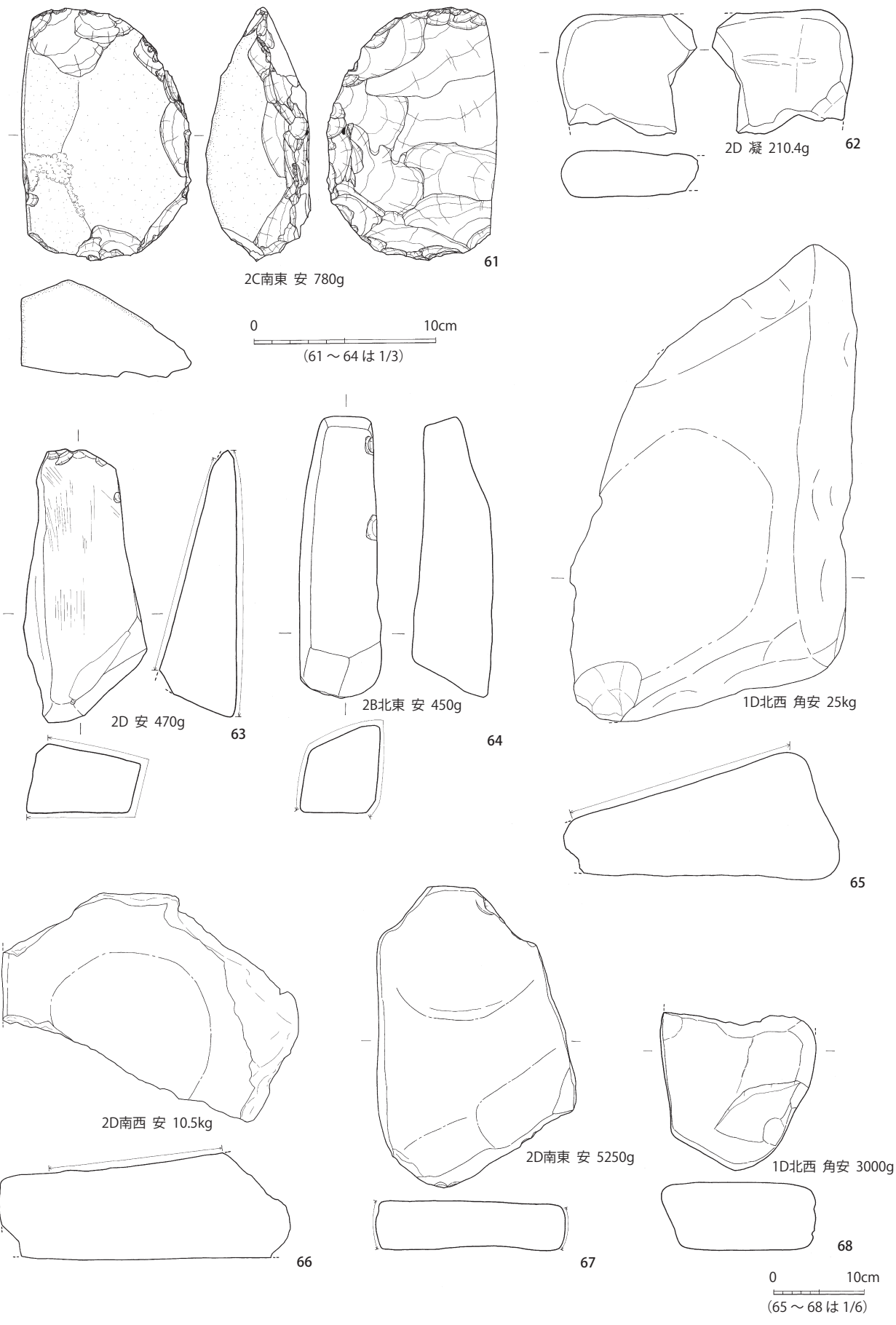
第6図 宮ノ下遺跡 区域1 出土遺物実測図①



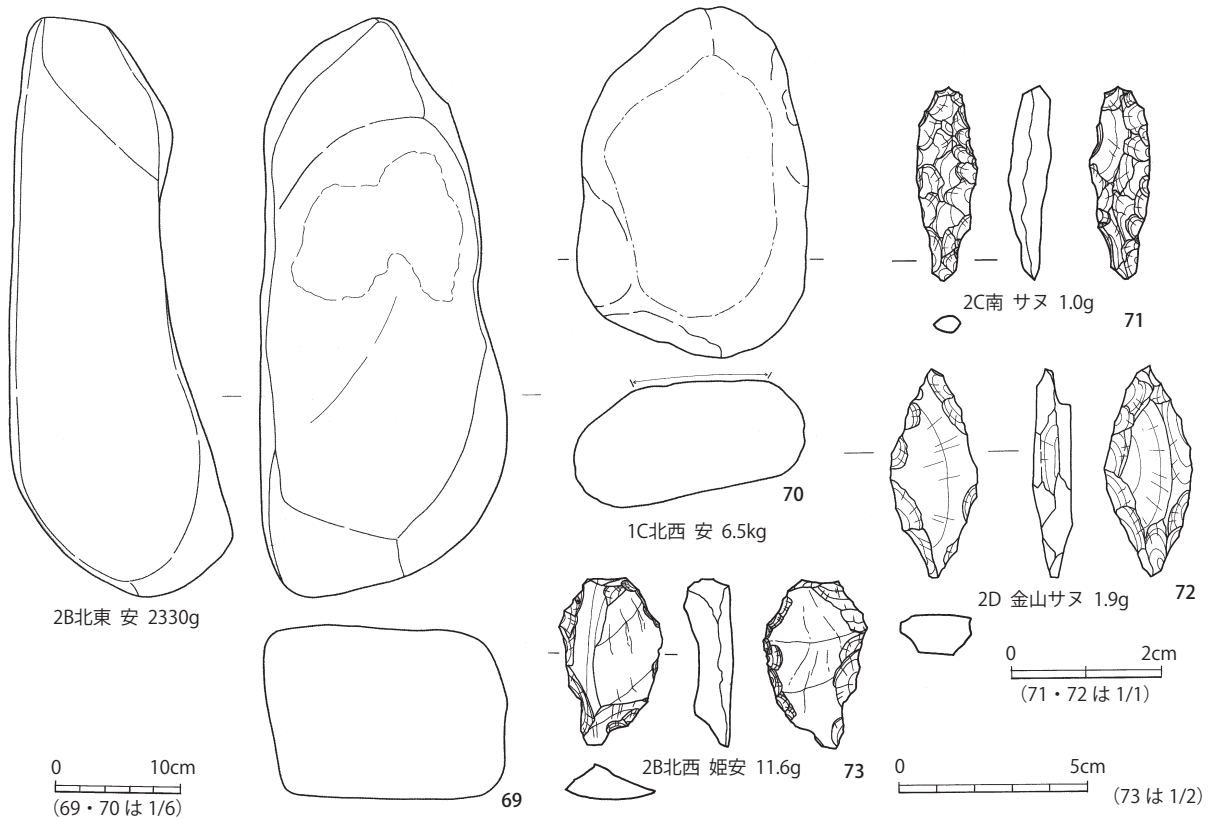
第8図 宮ノ下遺跡 区域1 出土遺物実測図③



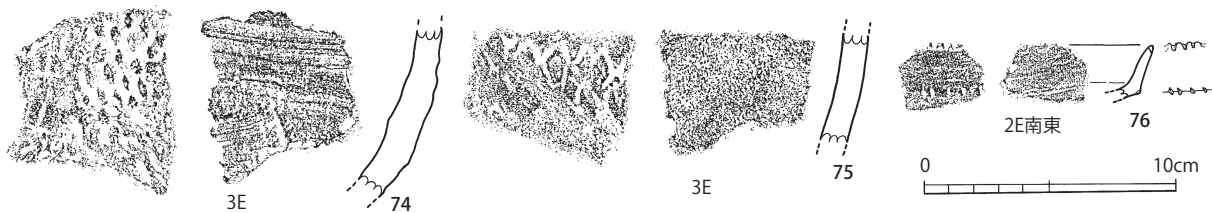
第9図 宮ノ下遺跡 区域1 出土遺物実測図④



第 10 図 宮ノ下遺跡 区域 1 出土遺物実測図 ⑤



第 11 図 宮ノ下遺跡 区域 1 出土遺物実測図 ⑥



第 12 図 宮ノ下遺跡 区域 2 出土遺物実測図

36～43は石鏃である。石材には姫島産黒曜石・推定腰岳産黒曜石・推定金山産サヌカイトなどが用いられる。36は正三角形で基部の挟りが浅い。37は三角形で基部の挟りが深い。38は二等辺三角形で基部の挟りが深い。39は五角形で平基。40～43は二等辺三角形で平基。晩期から早期あたりとみられる。41・43は未製品か。44～46はスクレイパーである。石材は安山岩で、44は縦長剥片、45・46は横長剥片で二次加工を施す。47～49は磨製石斧である。いずれも欠損・剥離している。50～55は打製石斧である。裏表に素材面を残すものが多い。56～58は敲石である。59は磨石か。60は敲石兼磨石である。61は敲石に使用した後に、石材として利用した石核か。62は欠損した磨石。63・64は砥石である。65～70は台石で、厚みのある扁平な安山岩を利用する。71・72は石錐。72は石鏃の再加工品の可能性がある。73は姫島産ガラス質安山岩の剥片である。

区域 2 (第 5 図・第 12 図)

区域 2 は調査区の北側部分にあたる。近現代の攪乱や埋め土による影響を受けていたが、南部分において区域 1 で検出した包含層の続きを検出した。また南東部でも区域 1 包含層に対応するとみられる暗褐色土を確認した(第 5 図)。この包含層からの出土遺物は全て破片で、出土量も区域 1 に比べると少ない。トレンチを入れ包含層の下位まで掘り下げを行ったが、遺物や遺構は確認できなかった。

74・75は早期の押型文土器である。田村式で、混じりこみとみられる。76は浅鉢の口縁部。外反し、端部と屈曲部に刻みを施す。

第4章 岡山遺跡発掘調査の成果

第1節 調査の概要

岡山遺跡は中津市本耶馬溪町落合にあり、字名は岡山で丘陵端部に位置する。丘陵壁面は自然崩落によるとみられる急傾斜面で、標高112mから上部には凝灰岩帯が、その下位には白色凝灰岩混じりの黒色土層、礫混じりの明茶色粘質土が堆積する。窟は岩帯に彫り込まれ、丘陵下に広がる狭平野や北流する跡田川を見下ろすように東に向かって開口する。

岡山遺跡の窟は近隣住民の方々により祀られていた場所であり、S-1には地蔵菩薩坐像が安置され、周辺には五輪塔などの石造物の破片が置かれていた。しかし調査前に地蔵菩薩坐像は別の場所へと移動され、石造物片は片付けられていたため、今回の調査では窟の検出・掘削と記録作成・移動された地蔵菩薩坐像の記録作成を行った。調査面積は約170㎡で、幅約23mの範囲に合計6基の窟を検出した(第13図)。

第2節 遺構と遺物

S-1 (第14図)

岡山遺跡の中で中心的な窟であり、前面には約4×2mの空地と昇降するための階段がともなう。垂直に切り立つ岩壁面には龕が彫られ、地蔵菩薩坐像が安置されていた。この龕を中心として、周囲の壁面は工具により丁寧に整形されている。龕の形状は正面長方形を呈し、高1.1m・幅2.1m・奥行1.2mである。奥壁から天井頂部にかけて緩やかにカーブし、入口付近が最大高となる。内部の天井部と床面には柱を据えるためと思われる円形の凹みが確認できる。龕の上部には、雨水避けと考えられる庇状の張り出しがみられる。

北側壁面には高0.6m・幅0.3mの縦長長方形の龕(小龕)をはじめ、複数の彫り込みが確認できる。復元はできないが、構造物もしくは窟を彫り出す際の足場などに利用された可能性が考えられる。南側壁面の先にはトンネル状の通路が南方向へと延び、S-2の中央部に開口している。この通路の隅に石造物の破片がまとめて置かれていたが、これらは周辺から集められたものとみられる。



地藏菩薩坐像（第 14 図）

地藏菩薩坐像は、S-1 の龕に安置されていたもので、現在では別の場所の祠に安置・固定されているため背面と側面を観察することができない。

目立った風化はなく状態もよいが、右手首に修復の跡がある。頭を丸め、耳は長方形を呈し、鼻翼部を深く刻む。左手には宝珠、右手には錫杖と思われる別製持物を持たせるための穴があげられていたが、現在では埋められている。蓮華台座の上で足を組み、厚みのある膝は肩幅よりも広く、台座横には衣が垂下する。台座の花弁は大きく平面的で、厚みを違えている。表面への彩色は確認できず、製作年代を示す紀年名などはない。石材は凝灰岩とみられるが、産地は特定できていない。羅漢寺に安置されている石造物の中に似た作風のものもあり、羅漢寺石造物の彫刻に携わった石仏師などの工人の製作による可能性が高い。やや形式化したものとみられることから、製作時期は 14 世紀末から 15 世紀前半頃と考えられる。

窟の加工痕について（第 15 図）

岡山遺跡の窟には掘削・調整痕が良好な状態で残存していた。そこで、複数種類の痕跡が確認できた S-1 周辺を観察したところ、以下の通りに分類できた。

- ① チョウナなどの鋭利な刃物による調整 a（小龕の左隣、左側）（左）、d（S-1 の下）
- ② ビシャンやタタキなど鈍い刃による調整 a（小龕の左隣、右側）
- ③ ツルハシによる掘削痕 c（S-1 の側壁）
- ④ 丸ノミやツルハシによる調整 b（小龕の奥壁）

現段階で、調整痕から細かな年代を推定することは困難だが、a のように調整痕の切りあいを確認できるため、S-1 本体を掘削した後の時代に周辺の小龕を掘削し、表面調整を施したと想定できる。また、①は古墳の石棺や古代の石造物にも類似した痕跡があり、③のツルハシのようなものによる石材加工は『当麻曼荼羅縁起繪巻』などの中世の絵図に図示されている。そのため、①と③は中世段階で一般的な加工方法として確立していたことがわかる。

このことから、S-1 の本体が掘削された時期は、内部に祀られていた地藏菩薩坐像と同様に中世まで遡る可能性がある。

【参考文献】

和田晴吾 1991 「石工技術」『古墳時代の研究 5 生産と流通 II』雄山閣

S-2（第 16 図）

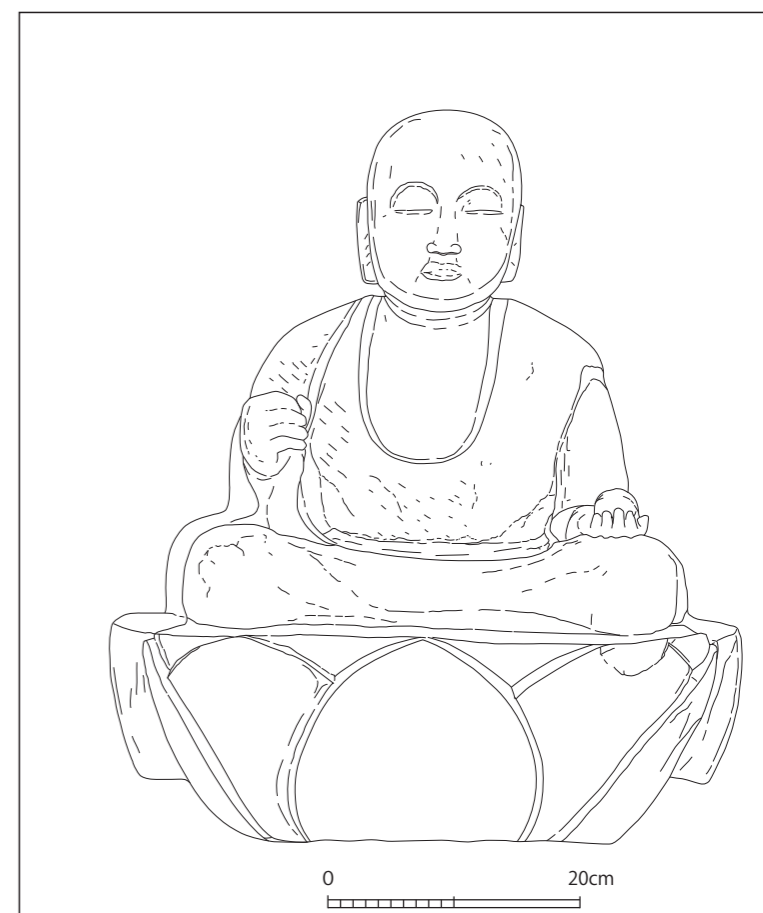
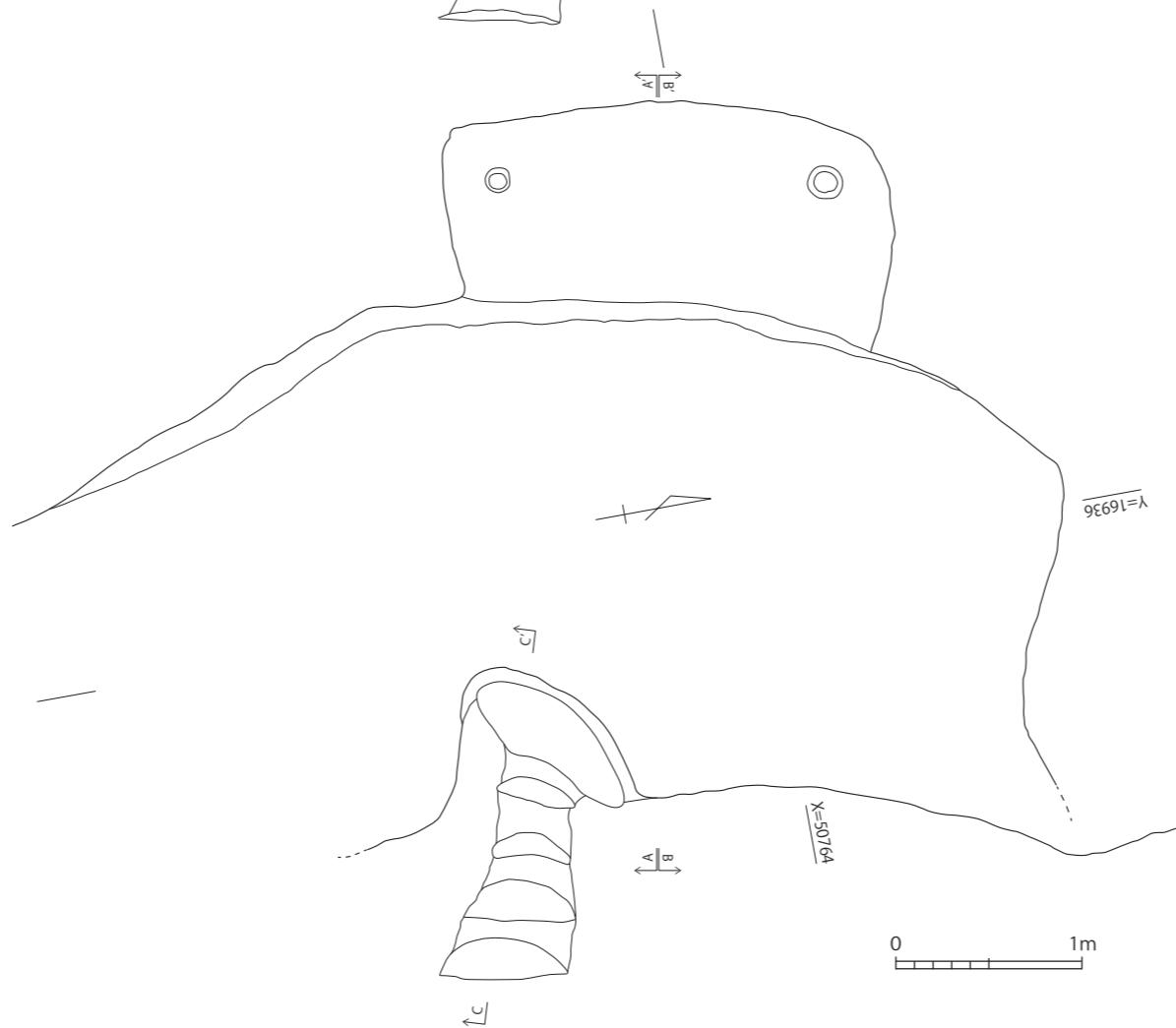
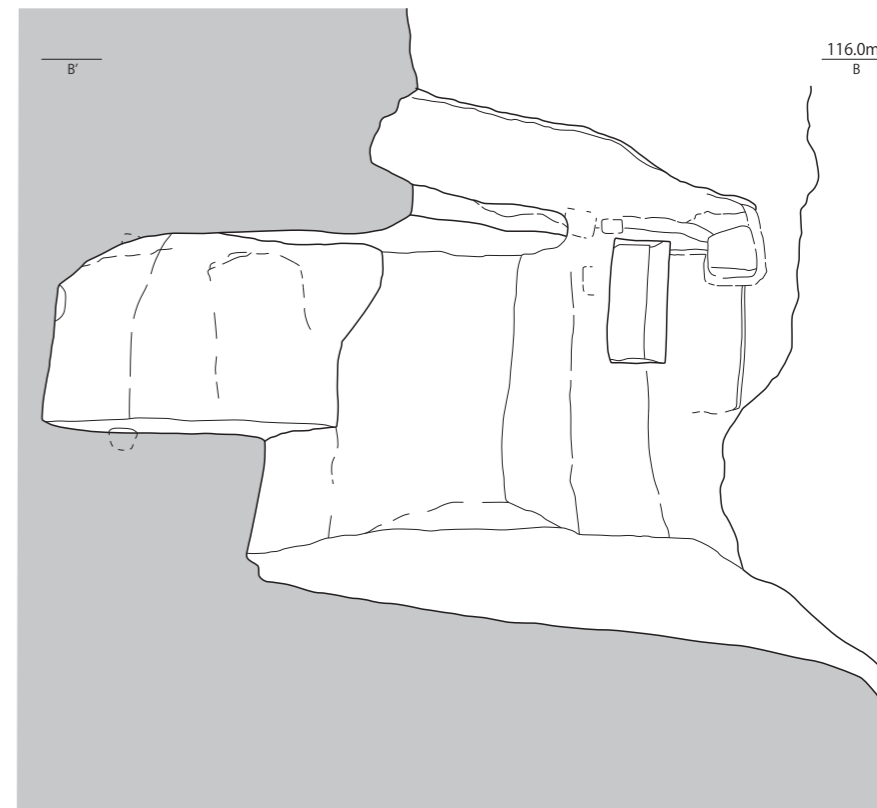
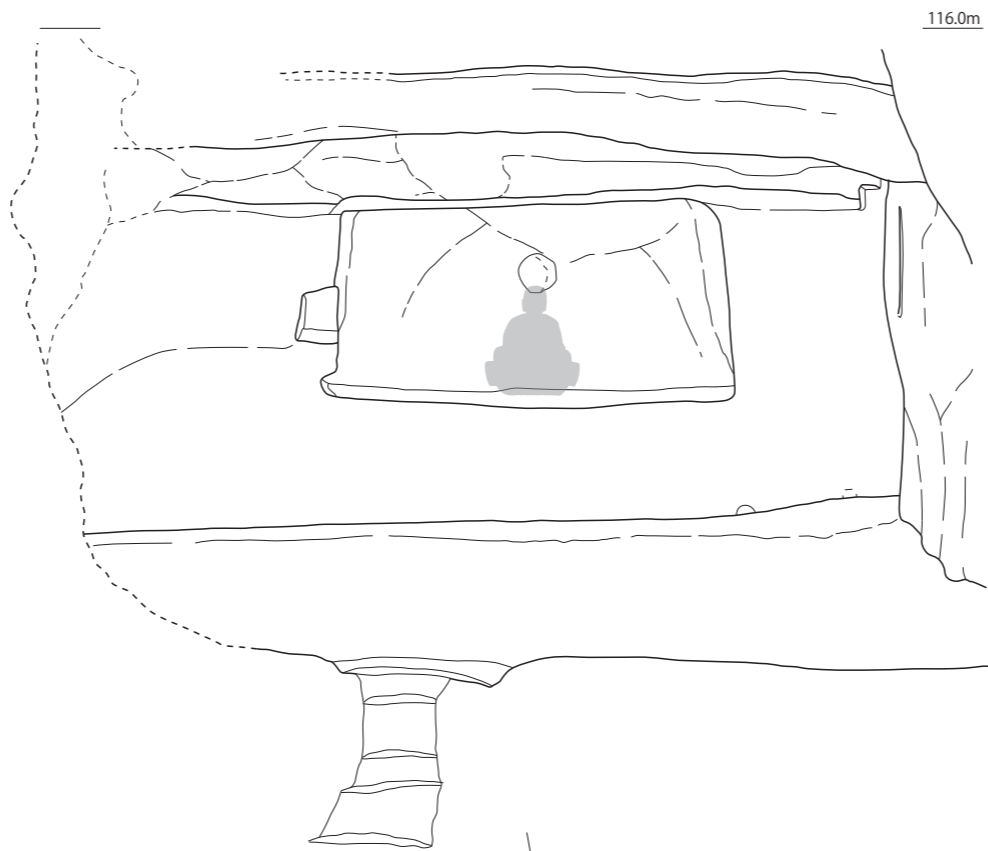
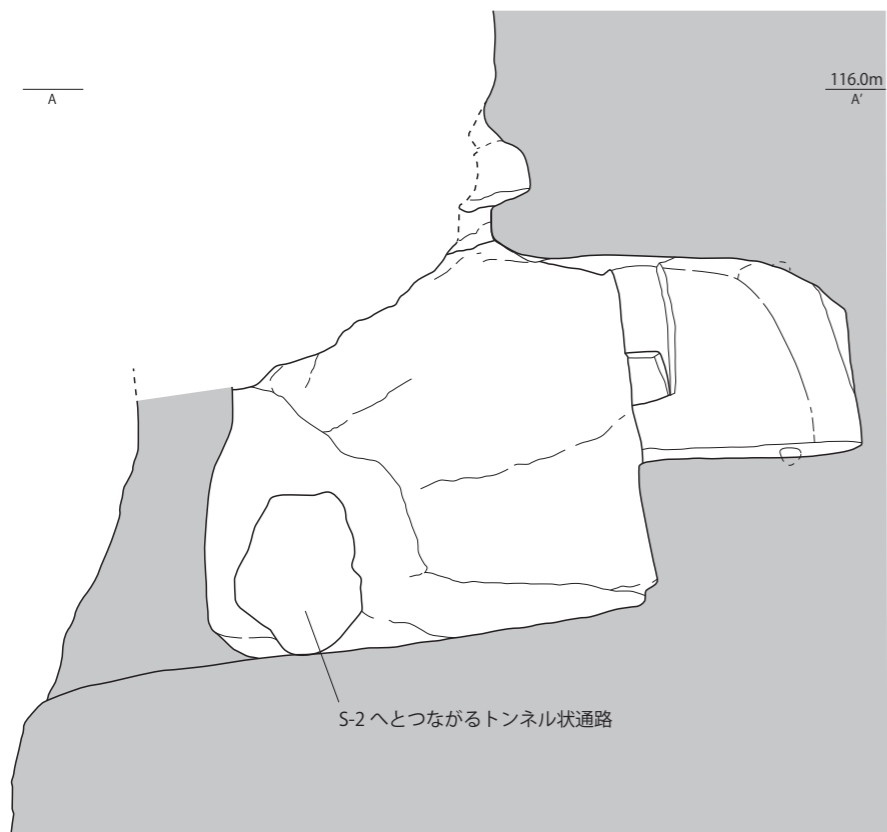
S-2 は S-1 の南に位置する窟である。正面台形を呈し、高 0.9 m・上部幅 1.5 m・下部幅 1.85 m である。奥行は手前が自然崩落したとみられるため、0.5 m と浅い。奥壁から側壁にかけてはチョウナなどによる調整痕分類①（以下、植田分類とする）が確認できる。奥壁中央部には S-1 から彫り込まれたトンネル状の通路が開口しており、この通路は S-2 が機能を失った後に彫られたものと考えられる。トンネル状通路の開口部は高 0.55 m・幅 1.2 m の不整形を呈する。遺物は出土していない。

S-3（第 17 図）

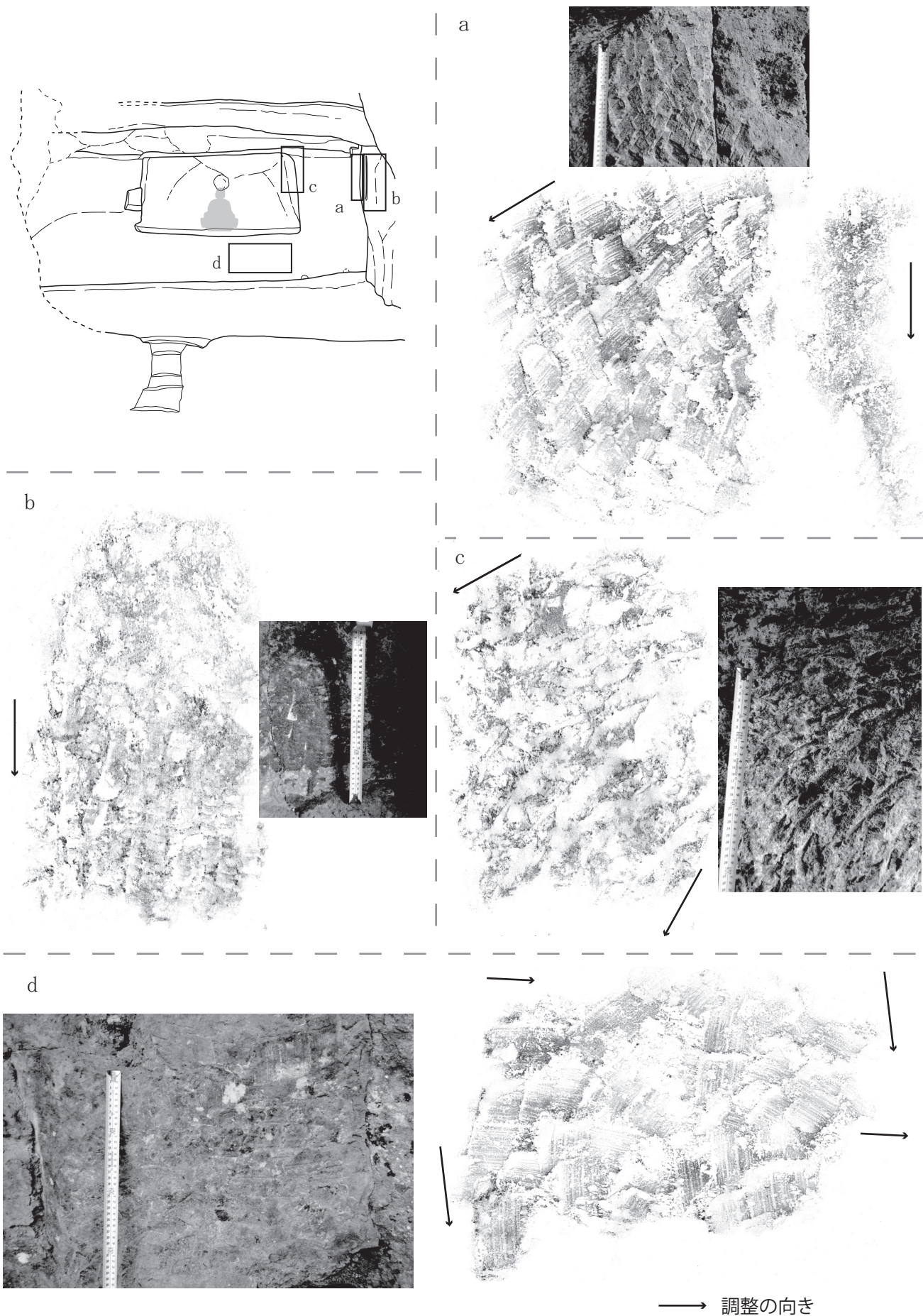
S-3 は S-2 の南に位置する窟である。正面長方形を呈し、高 1.2 m・幅 1.7 m・奥行 0.9 m 以上である。前面および北側部分は一部崩落している。北側壁は奥壁に対して直角なのに対し、南側壁は前面に向かって斜めに広がる。奥壁・側壁は苔生し風化しているが、植田分類③の調整痕が確認できる。床面中央部には 5～30cm 大の礫がまとまって出土したが、遺物は出土していない。

S-4（第 18 図）

S-4 は S-3 の南に位置し、岡山遺跡のなかでは最も離れた場所にある。半分近くが埋まった状態であった。正面は縦長の楕円形に近い形状を呈し、開口部は高 1.1 m・幅 0.6 m・奥行 0.6 m である。壁面には明確な調整痕は確認できず、遺物も出土していない。形状も他と異なるため、窟であるかの判断も難しい。

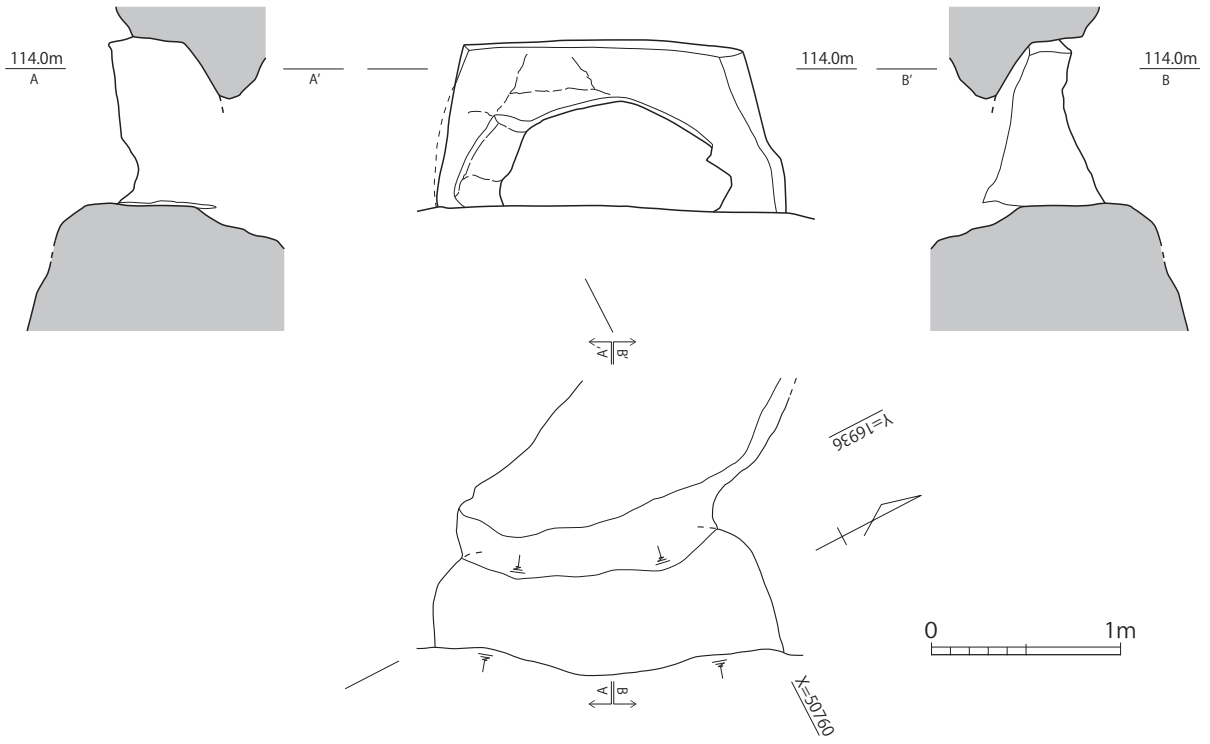


第14図 岡山遺跡 S-1 実測図 (1/40)・地藏菩薩坐像実測図 (1/6)

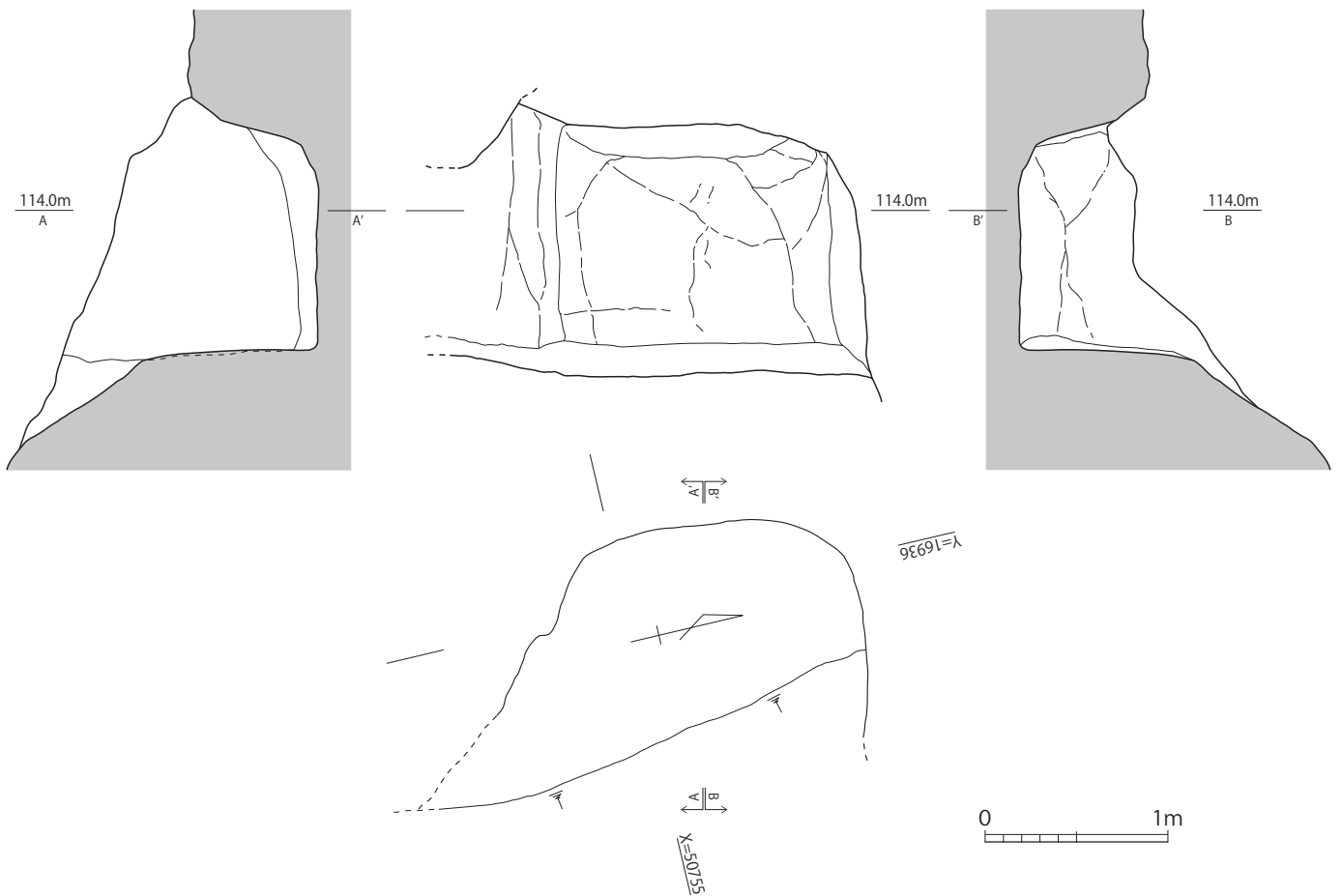


→ 調整の向き

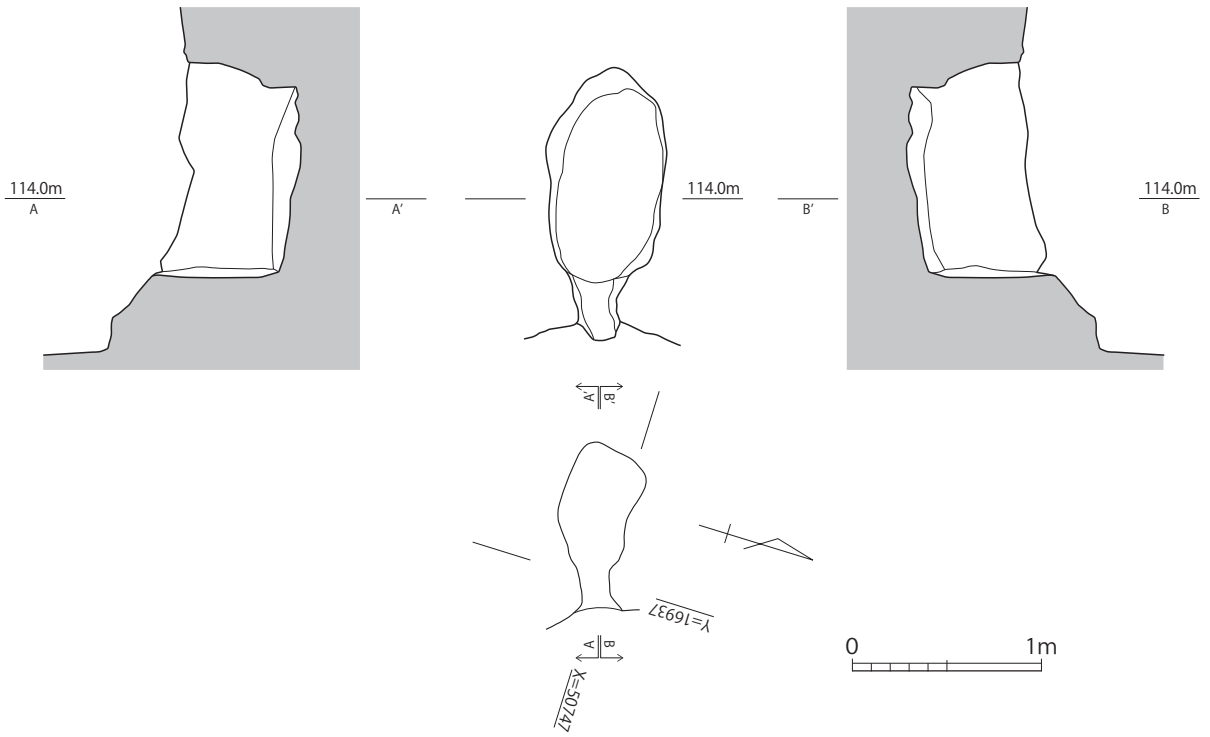
第 15 図 岡山遺跡 加工痕の拓本と写真 (1/5)



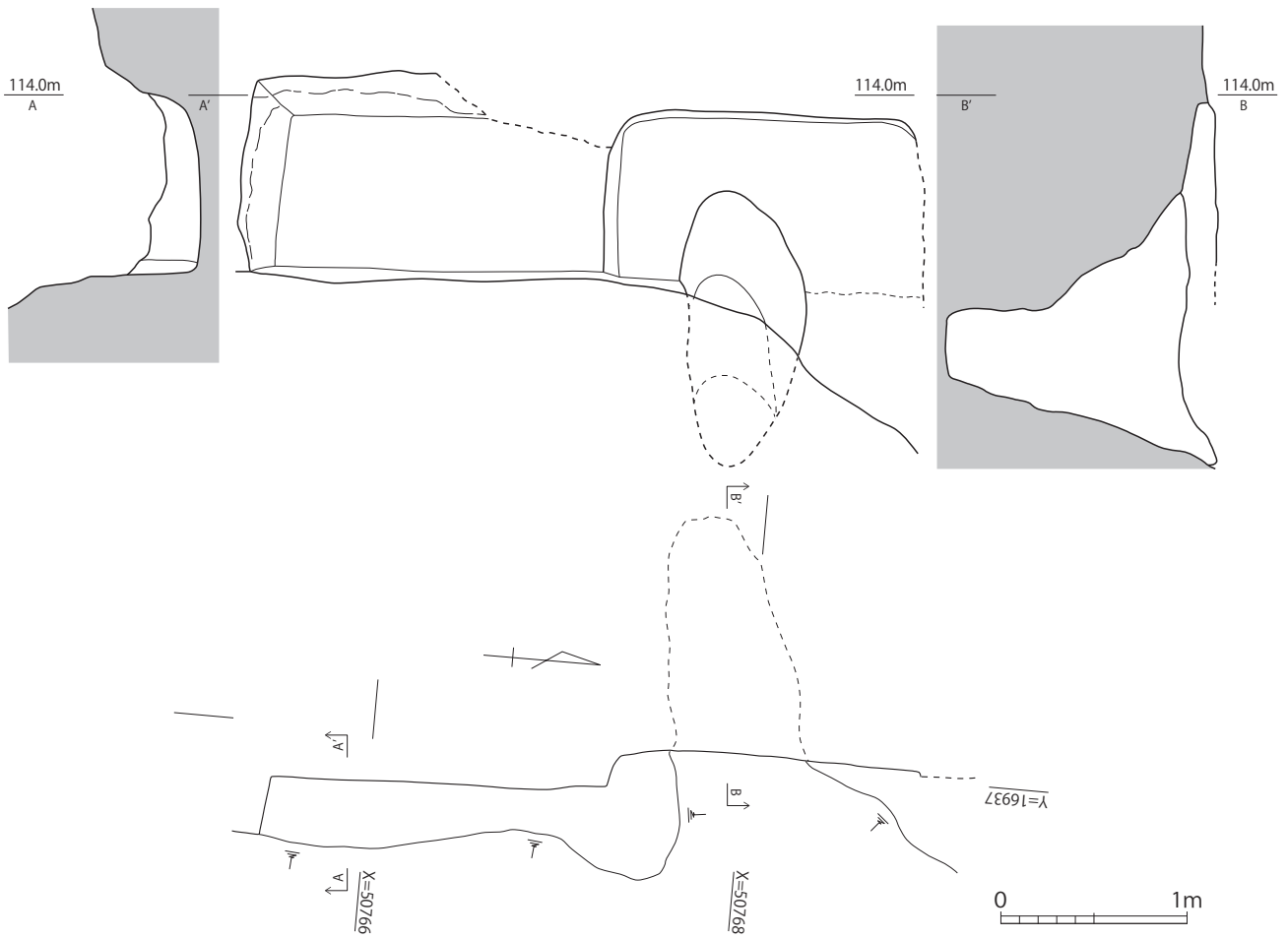
第 16 図 岡山遺跡 S-2 実測図 (1/40)



第 17 図 岡山遺跡 S-3 実測図 (1/40)



第 18 図 岡山遺跡 S-4 実測図 (1/40)

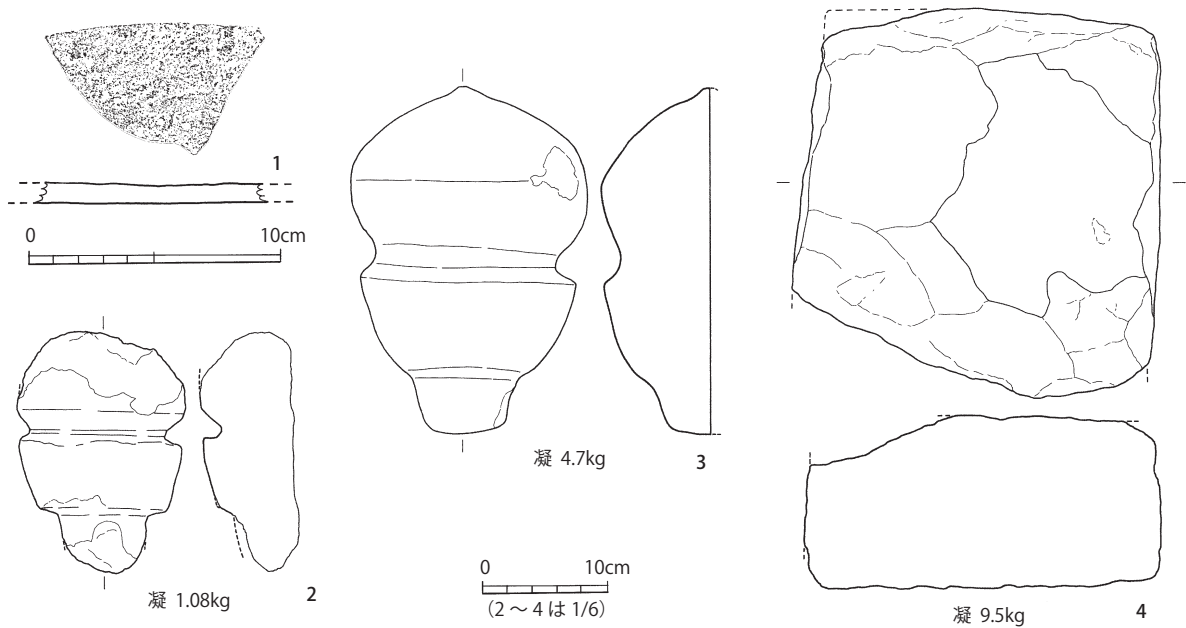


第 19 図 岡山遺跡 S-5・6 実測図 (1/40)

S-5・6 (第19図)

S-5・S-6はS-1の北に位置する窟である。S-5は正面長方形を呈し、高1.1m・幅1.9m以上である。奥壁の床面付近には植田分類③の調整痕が、側壁には植田分類①の調整痕が残る。前面は崩落によるためか、奥行が0.15～0.5mと浅い。S-5の北隣にS-6がある。S-5の北側壁を削り、S-5よりも奥に彫り込んでいるため、S-5の後にS-6が製作されたとみられる。

S-6は正面長方形を呈し、高1.0m・北壁が崩落のため明確ではないが推定幅1.8mである。前面は崩落したためか、奥行が0.2mと浅い。奥壁には植田分類①の調整痕が残り、その中央には楕円形の彫り込みがある。彫り込みは高1.3m・幅0.7m、奥行1.2mであり、入り口付近には植田分類③の調整痕が残る。北側の崩落後に彫り込まれていることから後世に彫られたとみられる。S-5・S-6から遺物は出土していない。



第20図 岡山遺跡 出土遺物実測図

出土遺物 (第20図)

岡山遺跡から出土した遺物は4点である。1はS-1前面にある空閑地の表土中から出土した瓦質火鉢の底部とみられる破片。外面は粗いナデ・内面は丁寧なナデ調整である。15～16世紀代のものか。2・3は五輪塔の空風輪である。2はS-1前面の表土除去中に出土したもので、半分には割れている。石材は凝灰岩。3は周辺から出土したもので、石材は凝灰岩。4は五輪塔の地輪である。石材は凝灰岩で、S-2の前面から出土した。断定はできないものの、これらの石造物のなかには調査前のS-1・S-2間のトンネル状通路を写した写真に類似した形状のものが確認できる(写真図版6「岡山遺跡トンネル状通路調査前」)ことから、片付けにともない移動したものとみられる。

第5章 総括

第1節 宮ノ下遺跡

宮ノ下遺跡では明確な遺構は検出できなかったものの、包含層が確認できた。包含層からはコンテナケース19箱分の土器・石器が出土した。遺物は特に2C・2Dグリッドでまとまって出土している。

包含層から出土した土器は、縄文後期中葉から晩期・弥生時代早期にかけての土器で、時期幅がある。総点数は数えていないが、これらの土器片は全て破片で、接合する資料は少ない。後期中葉の鐘崎式と後期後葉の北久根山式併行期に位置づけられる土器はわずかしこ出土しておらず、主体を占めるのは縄文晩期から弥生早期の土器で、なかでも深鉢・甕の割合が高い。突帯文土器はすべて刻目が入るもので、無刻目突帯文はなく、壺も確認できていない。包含層という性格と調査範囲が限定的であるため、本来の組成を示しているか問題があるが、現状では「下黒野式」段階（高橋2009）、「古戸0期」（井2019）と位置づけておきたい。

石器は土器とともに包含層中から出土しているため、縄文後期から弥生早期にかけての石器で、土器と同様に主体は晩期から早期と考えられる。石器の総点数は282点で、剥片が大部分を占める。器種ごとにみると、打製石斧15点、磨製石斧3点、石鏃14点、スクレイパー3点、石錐2点、石核1点、台石9点、敲石5点、磨石3点、砥石7点で、残りは剥片である。石器からは植物採取と狩猟を中心とした様相をうかがうことができる。石材には安山岩・角閃石安山岩・推定金山産サヌカイト・姫島産黒曜石・推定腰岳産黒曜石・姫島産ガラス質安山岩・蛇紋岩・凝灰岩・泥岩・チャート・石英が使用されている。総重量をみると安山岩（29,942g）と角閃石安山岩（29,846g）が群を抜いているが、周辺で採取できる身近な石材であることと、石斧・台石・敲石などの中・大型石器に使用されていることを考えると当然といえる。一方、姫島産黒曜石（262.9g）・推定腰岳産黒曜石（13g）・サヌカイト（91.3g）は石鏃や錐にのみ使用され、未製品や剥片も一定量出土していることから石材が持ち込まれ石器製作が行われたとみられる。

宮ノ下遺跡の調査区内で明確な遺構は確認できなかったが、持ち運びが容易ではない大型の台石や、小剥片が比較的多く出土していることから、今回の調査地点の近接地に集落が展開していたと推測する。周辺での試掘調査の成果を考慮すると、その候補としては調査区西方向・山側周辺があげられる。また圃場整備によって影響を受けているものの、今回の調査から包含層は区域1の西側から区域2の南東部分にかけて残っていると推測できる。出土遺物に時期幅が認められることは、縄文時代においてこの地が生活の場として繰り返し利用されてきたことを示しているが、生活基盤が農耕へと移行していくのにもない生活の場も変化していったとみられる。

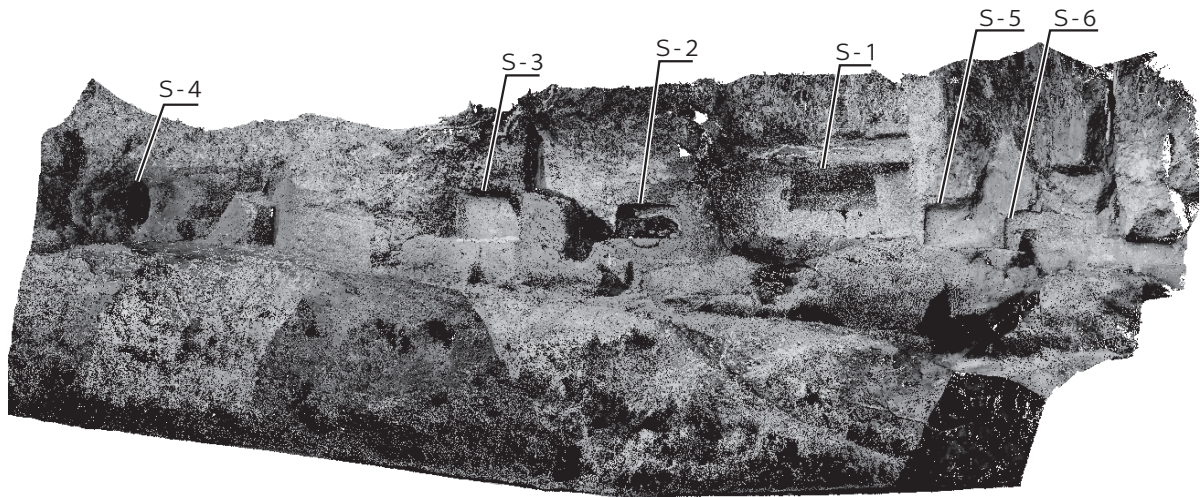
第2節 岡山遺跡

岡山遺跡では幅約23mの範囲に窟6基が確認できた。うち1基（S-4）については窟かどうかの判断が難しい。窟群のなかでもS-1は、前面に空閑地があり、龕を彫り込み石造仏を安置し、改変を受けながらも現在まで祀られていたことから、中心的な遺構であることがわかる。一方で、S-2～6は前面の崩落などにより、かろうじて人が通れるだけのスペースがあるのみで、傾斜も急となっているため現在では祀るには厳しい立地にある。加えて窟内部には埋土が流入し、内部には何も残されていないことから、窟としての機能はすでに失われ、現在に至ったとみられる。それはS-1南側のトンネル状通路がS-2の中央に開口していることからわかる。

こうした窟の製作時期をうかがう出土品は少ないものの、S-1に残された植田分類①・③の調整痕は中世には一般的な加工方法として確立していたものである。同様の調整痕が観察できるS-2・3・5・6については、床面がほぼ同じ標高に合わせられていること（第21図）からも、これらの窟は関連をもって同時期に製作された可能性が高い。またS-1の地藏菩薩坐像は、羅漢寺石造物に類似した作風や法衣垂下式蓮華座の年代観から14

世紀末頃から15世紀前半代のものとみられる。窟と地蔵菩薩坐像が元からセットであったのかは不明だが、現状ではともに中世段階に製作されたものにとらえておきたい。

岡山遺跡の窟とS-1に安置されていた地蔵菩薩坐像は、中世の窟信仰と石仏師の活動とともに、中世に隆盛を極めた羅漢寺が周辺地域に及ぼした影響の一端を示しているといえよう。さて本耶馬溪町落合に所在する雲西寺住職の話によると、岡山遺跡の所在する場所を地元では寺ヶ谷（註1）と呼び、寺ヶ谷の上には石切場があり、ここから羅漢寺の石造物を彫る石を取り出していたとの言い伝えがあるそうだ。その真偽は定かではないが、石材加工に関する伝承が窟や石造仏の残る場所の周辺にあり、羅漢寺との繋がりが語られていることは興味深い。



第21図 岡山遺跡 全景

（註1）

『本耶馬溪町史』『菖蒲庵入口の地蔵』のなかに「…この地蔵と同じ作風のもが寺ヶ谷にある。この像は両袖を蓮台の両端まで垂らす点が前者と異なる。…像高42cm。」とある。写真や図がないため特定はできないが、記述された地蔵は岡山遺跡S-1の地蔵菩薩坐像のことであろう。ちなみに宮ノ下遺跡の南西に位置する菖蒲庵（ショウブアン）には、地蔵菩薩像や羅漢寺系石造物とみられる菩薩坐像が点在している。

【主要参考文献】

- 井大樹 2019「第2節 古戸遺跡出土の弥生時代前期の土器について」『古戸遺跡』大分県立埋蔵文化財センター
- 江藤和幸 2011「旧本耶馬溪町地域の石造物」『石造文化研究』第29号 おおいた石造文化研究会
- 大分県教育委員会 2003『大分の中世城館第3集』大分県教育委員会
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2015『大分の中世石造物 第3集 分布図・地名表編（下）』大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 九州山岳霊場遺跡研究会 2020『求菩提山と豊前の山岳霊場遺跡 資料集』九州山岳霊場遺跡研究会
- 小柳和宏 2017「(4) 石仏」『大分の中世石造物 第5集 総括編』大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 佐藤佐吉 1953『耶馬溪村誌』耶馬溪村・耶馬溪観光文化協会耶馬溪村支部
- 高橋徹 2009「大分の弥生式土器編年－早期～中期－（上）」『大分県立歴史博物館研究紀要10』大分県立歴史博物館
- 中津市教育委員会 2013『羅漢寺調査報告書Ⅰ』中津市教育委員会
- 中津市教育委員会 2018『羅漢寺調査報告書Ⅱ』中津市教育委員会
- 本耶馬溪町史刊行会編 1987『本耶馬溪町史』本耶馬溪町
- 三谷紘平 2010「豊前羅漢寺の成立とその歴史的背景～南北朝期の法燈派禪の展開と中国羅漢信仰とのかかわり～」『史学論叢』第40号 別府大学史学研究会



宮ノ下遺跡 遠景



宮ノ下遺跡 区域1 空中写真



宮ノ下遺跡 区域1



宮ノ下遺跡 西壁土層



宮ノ下遺跡 区域2



宮ノ下遺跡 区域2 トレンチ土層



第6図1



第6図4



第6図6



第7図19



第7図23



第9図47 (裏・表)



第9図49 (裏・表)



第9図52 (裏・表)



第12図74



岡山遺跡 遠景



岡山遺跡（東より）



岡山遺跡（南より）



岡山遺跡 S-1



岡山遺跡 S-1 北側



岡山遺跡 S-1 上部



岡山遺跡 S-1 南側



岡山遺跡 S-2 へとつながるトンネル状通路



岡山遺跡 S-2



岡山遺跡 S-2 (南より)



岡山遺跡 S-3 礫出土状況



岡山遺跡 S-3



岡山遺跡 S-4



岡山遺跡 S-5・S-6



岡山遺跡 S-5・S-6 (北より)



岡山遺跡 S-1 地藏菩薩像



岡山遺跡 調査前



岡山遺跡 トンネル状通路調査前



第 20 図 2 (右)・3 (左)

報告書抄録

ふりがな	みやのしもいせき・おかやまいせき
書名	宮ノ下遺跡・岡山遺跡
副書名	一般国道212号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(2)
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	植田紘正・服部真和
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1-61
発行年月日	2022(令和4)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやのしもいせき 宮ノ下遺跡	大分県中津市本耶馬溪町落合	44203	203304	33° 27' 07"	131° 11' 07"	令和2年 2月4日～ 3月9日	637 m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物		特記事項		
宮ノ下遺跡	—	縄文時代・弥生時代		縄文土器・弥生土器・石器				
要約	包含層中より縄文時代後期から晩期・弥生時代早期にかけての土器・石器が出土した。明確な遺構は検出できなかったものの、遺物の出土状況から周辺に遺構が展開する可能性が高い。							

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかやまいせき 岡山遺跡	大分県中津市本耶馬溪町落合	44203	203307	33° 27' 27"	131° 10' 55"	令和2年 10月29日～ 11月12日	170 m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物		特記事項		
岡山遺跡	—	中・近世		五輪塔・瓦質土器				
要約	6基の窟を検出した。なかでも中心的なS-1には地藏菩薩坐像が安置されており、その作風や特徴から羅漢寺石造物との関連性がうかがえる。また窟に残された調整痕などから、製作年代は中世段階と考えられる。							

宮ノ下遺跡・岡山遺跡

一般国道 212 号三光本耶馬溪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 23 集

令和 4 年 3 月 31 日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター

〒 870-0152 大分県大分市牧緑町 1-61

TEL 097(552)0077

印刷 大野印刷株式会社

〒 874-0902 大分県別府市青山町 1-7

TEL 0977(21)0505
